

散発下痢症患者から分離されたニューキノロン耐性サルモネラについて

サルモネラは、赤痢菌や大腸菌と同じ腸内細菌科に属する、急性胃腸炎原因菌です。牛、豚などの家畜や、ペット動物などの腸管内容物から、しばしば分離されます。

当所では、埼玉県内におけるサルモネラの動向を把握するために、散発下痢症患者および健康者から分離されたサルモネラについて、主としてその血清型と薬剤耐性の面から検討しています。

2002年に県内で分離されたサルモネラ104株のうち、31株(29.8%)が、12薬剤(クロラムフェニコール、ストレプトマイシン、テトラサイクリン、カナマイシン、アミノペニシリン、ナジクズ酸、セフトキシム、シプロフロキサシン、ゲンタマイシン、ホスホマイシン、ルフロキサシン、ST剤)のいずれかに耐性を示しました。

その中でも、12月に分離された血清型Typhimuriumは、シプロフロキサシン、ノルフロキサシンのニューキノロン系薬剤を含む、9薬剤に耐性を示す多剤耐性菌でした。血清型Typhimuriumは、ファージ型DT104をはじめとして、薬剤耐性率の高い血清型ですが、ニューキノロン系薬剤に耐性を示す菌株が分離されたのは、県内でも初めてです。

ニューキノロン系薬剤は、細菌性下痢症の治療に使用されることが多く、今回の事例でも、当初はニューキノロン系薬剤が使用されていました。しかし、治療効果が上がらず、薬剤感受性試験を実施し、ホスホマイシンに切り替えて除菌に成功しました。

ニューキノロン耐性サルモネラの動向については、今後も注意する必要があります。

県内で分離されたサルモネラの薬剤耐性率の推移

